

誰もが^{さび}いま淋しい 片岡義男



角川文庫 5973

昭和五十九年十二月二十五日 初版発行
平成三年六月十日 二十三版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

編集部(〇三)三八一七―八四五―

電話 営業部(〇三)三八一七―八五二―

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

誰もがいま淋しい

片岡義男



角川文庫 5973

その2ドアの車体の色は、きわめて淡い黄色だ。あまりに淡いため、至近距離から見ると、ほとんど色がついていないように思える。あるいは、かつてはあった色が、いまではすっかり褪せてしまったように見える。

しかし、すこし距離をとってながめると、たいへんに明るく華やかだ。ある一定以上の距離をとると、近くで見るときの色褪せてしまったような印象は、どこにもない。非常に淡い黄色ではあるけれどもそれはくっきりとした色であり、華やいで人の目をひく。ことさらに華やかさを強調した色ではないが、必要にして充分な明るさを静かにたたえている。

車体ぜんたいは、平たくて大きい、という印象を強く持っている。現実には、その車体はたしかに大きい。全長が230・5インチもあり、横幅は80インチにもおよんでいる。総重量は5052ポンドあり、これだけの重さとサイズの車体のために、ヘリコプターが降りることのできるほどに広いエンジン・フードの下には、8ヴァルヴによるオーヴァーヘッド・ヴァルヴの460キュービク・イ

ンチ排気量のエンジンが用意してある。

平たくて大きな車体には、しかし、散漫であったり間が抜けていたりするような部分は、どこにもない。一見、たいへんに大味な造型だが、こまかく観察していくと、車体の平面や曲面、それに直線や曲線のつくり方に注意深く凝ったところが数多くあり、そのような凝った部分がぜんたいとしてさりげなくしかも緊密にからみあっている。したがって、その大きなボディの造型ぜんたいをよく見たあとでは、印象は精悍^{せいいかん}さのようなものへとしぼりこまれている。

たとえば思いっきり広いエンジン・フードだが、単純な平面ではない。中央にまっすぐ一本の稜線^{りょうせん}が走り、その稜線をもっとも高い部分として残しつつ、両側のフェンダーに向かって稜線の左右の平面はおだやかなゆとりを保ってダウン・グレードとなっている。

稜線^{りょうせん}じたい、エンジン・フードの先端へ近づくにしたがって、高さを増している。距離のゆとりは充分にあるから、すこしずつ高くなっていくそのありさまが、ぜんたいとしてながめなおすと、エンジン・フードの広さと絶妙にバランスのとれた小粋^{こいき}さとなっている。

エンジン・フードの中央を走るまっすぐな一本の稜線は、フードの先端で高さ

をきわめる。そして、マスコットにかわる洒落たオーナメントを兼ねつつ、フロント・グリルを正面中央で正確に二分するピラーへと、変わっていく。このピラーの、直線と曲面による造型が、クロームのグリルが水平に何本も横に走るグリル・ワークと調和のとれた凝りようだ。

幅の広いグリルは、センター・ピラーで二分されることにより、ひきしまって洒落た精悍さのような面構えを獲得している。ゆとりを持って水平にのびきったグリルの左右両端に、ヘッド・ライトが上下二連で装備してある。上のヘッド・ライトには、フェンダーからのびてきた部分がクロームの縁取りをされたうえで、ひさしのようにおおいかぶさりつつ突き出ている。下のヘッド・ライトは、バンパーの両端の、ふくれあがって台座のようになった部分でしっかりと支えた格好だ。

ボディ側面の造型においても、たつぷりとゆとりのある広さのなかに、流れるような直線や平面、カーヴそして曲面が、思いがけないやり方で、かみあわせてある。

正面のガラスの上からはじまっている屋根は、リア・ウィンドーをこえてトランクの後端まで、ひとつにつながった線を流麗に描いている。屋根、リア・ウイ

ンドー、そしてトランクと、普通はラインが三種類に分かれてしまうが、この淡い黄色の2ドアの場合は、ひとつのきれいにつながったラインとなっている。ボディゼンたいが実際よりさらに大きく平らに見えるのは、このラインのせいだ。

2

一定の距離をとると華やかな明るい色に見えるごく淡い黄色のボディ・カラーは、いまのように雨に濡れていると、なおさら華やいで見える。濡れたボディは艶をたたえて輝き、瑞々しい生氣を感じさせる。

アスファルトの道路も、雨に濡れている。濡れることによって、アスファルトのいつもなら平凡な黒さが、いまは生き生きとしている。路面ゼンたいが雨を吸いこんで呼吸しているかのようだ。

二車線の道路の両側は、幅広く草の生えた平坦な空き地となっている。長さ二メートルほどにわたって、道路の片側だけが、バス停ないしは一時駐車エリアのように、一車線ぶんほどふくらんでいる。そのスペースの中央に、淡い黄色の2ドアの自動車は、とまっている。

草地が終わると、道路の両側とも、深い林だ。草地に茂った夏草が、そして林

の木々の枝に何重にもかさなりあっている緑の葉が、雨に濡れている。草や木の勢いは、かさなりあう緑の葉の深さであり、雨はその勢いに静かにみがきをかけている。

林が数百メートルにわたってつづき、そのむこうは丘のつらなりであり、丘はやがてさほど高くない山なみへと、つながっている。

3

ボディゼンたいが雨に濡れている。ボディのさまざまな直線や曲面にはりついている雨滴による薄い水の膜は、ただ単に水の膜であるのではなく、なにか特別にすぐれた輝きや命のようなものを持った不思議な生き物に見える。自動車のボディゼンたいにおける、ゆとりのあるスペースのなかでの粋に洒落た造型が、そのボディに宿った雨滴をそんなふうに変化させるのだ。大きいけれどもゼンたいにわたって流麗で精悍なかたちは、透明な雨滴の膜をまとして静かに休息し、アスファルトの道路やその両側の草地、そしてそのさらに向うの林や丘のつらなりなどを相手に、息づかいのやりとりをおこなっているように思える。深い緑に囲まれて道路のわきにとまっているその大柄な自動車は、雨に濡れながらまるで美

しいひとつの生き物のようだ。

正面のガラスも、雨に濡れている。そのうえに、さらに雨滴が降りかかっている。空中を舞い落ちて来てガラスの上に宿った雨滴は、宿った瞬間、どれもが不規則なカタチに変形し、さらに次の瞬間にはおたがいに溶けあうようにひとつに大きくつながり、ガラスの曲面の上を流れ落ちていく。このことのくりかえしが、広いガラスの上いちめんで、おこなわれている。

風が吹いた。草地の向うの林がざわめき、草地のなかの丈の高い草が風の方角へいつせいになびいた。風に乗って、斜めあるいは水平に近い角度で、雨滴がいくつも自動車の正面のガラスに吸いよせられた。

左右ふたつあるワイパーが、突然、作動をはじめた。ゆったりしたテンポで、ワイパーのブレードは、ガラスの上の雨の膜を扇のかたちで右へ左へと、ぬぐった。雨をワイパーによってぬぐわれてくつきりとなったガラスごしに、運転席にひとりですわっている女性が見えた。

4

2ドアの内装はすべて黒だ。天井。シート。ダッシュボード。ドアの内側。ス

テアリング・ホイール。フロア。トランスミツションのトンネル。どこもみな、深みのある落ち着いた黒で統一されている。

運転席の彼女は、外に出てまっすぐに立てばきれいにバランスのとれていることがよりいっそうはつきりするにちがいないしなやかな若い体に、淡いグレーのスカートに白い半袖^{はんそで}のシャツを着ていた。スカートもシャツも、きわめて簡潔なラインを持った、一見なんでもないスカートとシャツだった。淡いグレーに白というトーンが、そして余計な飾りをすべて排した簡潔なつくりが、内装の深味のある静かな黒によく調和していた。

右手をセレクター・レヴァーにかけた彼女は、レヴァーをパーキングの位置からリヴァースをへて、ニュートラルにもどした。おなじ右手をこんどはイグニッションのキーにのぼし、エンジンを始動させた。左手をステアリング・ホイールにかけたまま、セレクター・レヴァーをDレンジに入れた。クリーピングによって、ふわりと、その大きな2ドアは、発進した。

車体の大きさや重さに、エンジンは充分に対抗しえている。まるで空中に浮き上がる直前のように軽く発進した2ドアのアクセレーター・ペダルに、彼女は、夏のサンダルをはいた右足を乗せた。クリーピングのなめらかさにかさねあわせ

るように、彼女はペダルを踏み下げた。ふわり、とした軽い発進のしかたを、もつともはつきりと感じているのは、ドライヴァーである彼女だ。

雨に濡れたアスファルトの路面をタイヤで踏みながら、2ドアは、斜めに道路へ出ていった。大きくてしかも精悍なボディゼンたいに、雨滴をさらに数多くやさしく受けとめるために、優美にしなやかに、その2ドアは自らの意志によって動きはじめたように見えた。

5

この雨は、梅雨の雨だ。黄海に低気圧がある。大量の水蒸気の集中帯である梅雨前線が北上して来ている。これから一週間は、その前線は停滞する。したがって関東から西日本の全域が雨であり、昨日の西日本の太平洋岸では一時間の雨量が五〇ミリ以上となった地域もある。関東南沖に停滞する梅雨前線の上を、低気圧がとおっていく。強い雨をもたらした厚い雲域は、九州から中国地方へと移っている。さらに発達しながら東北東に進み、日本海に入ったあと、明日の夜には関東の北部に達し、より大きく発達するはずだ。

滑走路に沿って長方形にのびている空港の敷地の西側に、道路がまっすぐにある。滑走路からは三〇〇メートルほど離れている。ちょうど中間あたりに、高く金網のフェンスが張りめぐらせてある。金網から道路までは平坦な草地であり、道路からは滑走路がよく見える。滑走路の向うに、空港の建物や管制タワーがある。道路をへだてて空港の敷地と反対側は、広く平坦な草地だ。そのさらに向うは畑の広がりであり、畑が終わると低い山なみへのスロープがはじまっていく。山なみは、雨のなかに煙っているように見える。

滑走路と平行にのびている道路を、彼女の運転する淡い黄色の、大柄な２ドアが、徐行していた。ボディゼンたいに雨滴を受けつづけ、正面のガラスのうえでは二本のワイパーが正確なリズムで作動し、降りかかつては薄い膜となって流れる雨を右に左にと、ぬぐっていた。

運転席の彼女は、サンダルをはいた右足を、アクセレレーター・ペダルから浮かせていた。２ドアは、クリーピングだけで前進していた。両手をステアリング・ホイールの頂上にかさねあわせるようにかけ、彼女は正面のガラス越しに遠

くを見ていた。

ボーイング737が一機、着陸のために滑走路に向かって進入しつつあった。高度はすでに充分にさがりきり、地上からその巨大な機体の腹まで、一〇〇メートルないだろう。

滑走路に向かって、浅い角度でまっすぐに降りてくる737を彼女は見守った。平凡なブルーと白とに機体を塗り分けた737は、やがて着地した。主車輪が滑走路の路面に触れると、その瞬間、滑走路の上の雨はまっ白い水煙りとなり、胴体や主翼の裏側ぜんたいをおおいつくす勢いで、盛大に広がった。機体はいったん軽く浮きあがり、再び着地し、こんども水煙りがあがった。水煙りがおさまり、737は滑走路の上を走って来た。彼女の乗った2ドアとすれちがうとき、737のエンジンはリヴァースにきりかわり、音が変わった。

彼女は、左手首のクロノメーターを見た。彼女の時計は、常に三分から五分、進んでいる。進んでいるぶんをさし引くと、いま着陸したボーイング737は、定刻ちようにこの地方都市の空港に到着したことになる。

滑走路の端に向けて走っていく737を左肩越しに見送って、彼女は、右足をアクセレレーター・ペダルにもどした。セレクターをおだやかにDレンジに入れ、

ペダルを踏みこんだ。2ドアは、ゆつたりと加速をはじめた。

ほかに自動車の走っていない広い道路で彼女は2ドアをUターンさせ、空港の敷地の向う側にある建物の、正面入口に向かった。

7

空港の建物の正面から駐車場の前をまわり、淡い黄色の大きな2ドアは、空港の敷地を外の道路へ出て来た。

運転席には彼女がいて、その右となりの助手席には、ついさっき到着した737に乗って東京から来た彼が、すわっていた。ふたりは今日のこの時刻にこの空港で待ちあわせをし、いま落ち合ったばかりだ。彼が持つて来たジュラルミン製のアタッシェ・ケースが、うしろのシートの上に横たえてある。

正面のガラスごしに道路の前方へ視線をのばし、

「梅雨の雨だね」

と、彼が言った。

「そうよ」

彼女がこたえた。

「もう、梅雨か」

「ええ」

「明ければ、夏だ」

「そうね」

「早い」

「なにが早いの？」

彼女が、きいた。

「時間のたつのが、さ」

彼が、こたえた。そして、助手席のなかで彼女に向きなおった。彼女の端正な横顔のラインを視線でたどっていき、

「久しぶりだ」

と、彼は言った。

「半年以上になるでしょう」

彼女がそうこたえ、

「そんなになるかな」

と、彼がききかえした。

「なるわ」

「そうかな」

「このまえふたりで会ったのは、一月のはじめですもの」

「そうだ」

「いまは、六月のなかばを過ぎてるのよ」

彼女の言葉に、彼はうなずいた。

「たしかに、半年以上だ」

左手をのばした彼は、自分の左どなりにいる彼女の肩に、指さきを触れた。肩から二の腕、ひじと指さきでたどっていき、

「久しぶりだ」

と言った。彼女の腕から指さきを離し、

「ぼくたちは、半年も会わずにいたのか」

と、感心したように言った。彼女は、黙っていた。体を正面に向けなおした彼は、

「六か月ものあいだ、きみはどうしてたのだい」
と、きいた。